

—— 苦学生生活 ——

中大法学部に入学した私は、文京区本郷の東大正門近くの「鶴山館」にお世話になった。鶴山館は、遡れば明治初期、文明の新しい空気が全国津々浦々に広がり青雲の志を抱いて東京に集まる青年が増加した時代に、美作国（津山市を中心とする岡山県東北部）に縁故を有する東京留学生の寄宿舎として設立され

私の歩んだ道

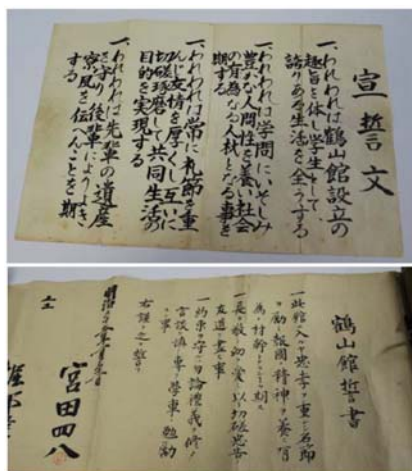
小林 元浩

④

た「岡山県人寮（男子学生寮）」である。明治の設立以来、「社会有為な人材となることを期する」として、盟誓式（入館式）では「鶴山館誓書」に誓い、毛筆で巻物署名することを伝統としていた。私が在籍した当時は、東大、早稲田、中央、慶応など各大学の男子学生が共同生活をしていたが、なにしろ規律が厳しく、入寮早々、先輩学生に屋上に呼び出され

て整列のうえ説教を食らったことが今となつては懐かしい。いまでも私の趣味となつてゐる囲碁を覚えたのも、先輩の手ほどきによるものだ。

この頃の思い出としては津山出身の哲学者出隆（いでたかし）先生との交流がある。同郷のご縁で紹介を受け、ご自宅に何度か伺った。「哲学以前」や「ギリシアの哲学と政治」など



明治 24 年以來続く、「鶴山館」の誓書と宣誓文
（公益財団法人鶴山館のHPより引用）

戦前の哲学者として著名な学者であったが、私がお会いした晩年は、ソクラテスのような面影を漂わせて、ご自身の歩んできた道を語ってくださった。当時は高級品であった両切りの缶入りピースをすすめて下さったことが、一人前の人間として認めてもらえたようで妙に嬉しかったことを覚えてゐる。

この当時、大学紛争を鎮静化させるための大学管理法制定など管理統制が強まる一方、学生運動も停滞し、若者からは自由・闊達さが奪われて、一種の息苦しさが社会全体を覆っていたように思う。司法試験勉強にも追われる身で私が心の安寧を見出したのは、座禅であった。鶴山の曹洞宗大本山總持寺の座禅会に参禅して瞑想すると、自分の煩惱や内面の御し難い激しい血を客観的に見つめ直すことが出来て不思議と心が落ち着いてた。

を送金してきた。母にとつての大金も東京で1年間生活するには到底足りず、夜警や新聞配達のアルバイトで糊口を凌ぎながら勉強することになった。そのような姿を見るにみかねてか、弁護士西徹夫先生にご紹介いただき、年度明けの4月より千代田区立番町小学校の警備主事として採用され、生活は随分と楽になった。

こうして迎えた司法試験。大学3年のときに択一試験に合格してかすかな期待もあったが、その後卒業1年目まで論文試験は落ち続けた。卒1で不合格になったときには、このまま岡山に戻って公務員になろうかとの考えが頭をよぎったが、故郷の母から「今の苦勞を苦勞と思わず頑張れ」とはっぱをかけられた。あの言葉がなければ、今頃全く別の人生となっていただろう。母は、言葉だけではなく、あんなにたったのお金をかき集めたと言つて50万円（今の150万円位）

そしてその年の秋、司法試験最終合格。晴れて湯島の司法研修所の門をくぐった。司法研修所は三三期で10クラス、私の居た3組は多士済々、約50名の人材揃いであった。中でもクラスの取りまとめ役は年配者で存在感のあった田中昭彦さん（現在和歌山で弁護士）。檢察教官の紹介で後の妻となる女性にも出会った。妻の母方祖父が裁判官であったことにも縁を感じ、交際を1年程経て結婚に至った。私は弁護士会や青年会議所の活動など、仕事には結びつかないような公益的活動に従事することもあり、妻は身近な良き理解者でもある。